

彩球オーディオ倶楽部 第71回新春発表会

新年の吉事を予感させるような快晴に恵まれた1月21日(土)、彩球オーディオ倶楽部の第71回新春発表会が埼玉県幸手市の幸手市コミュニティーセンターで開催され、約80名のオーディオファンが参加しました。例年通り新年はスピーカーシステムをテーマとする発表会で、「新旧小型スピーカーシステムを楽しむ」というサブタイトルで会員5名の作品が披露されました。

その後、関口英雄先生の「JAZZ 四方山話」や、MJ誌で活躍されている小澤隆久先生の講演「ステレオ音源の疑似モノラル的再生の勧め」の講演も行われました。また、MJ誌ライターの岩村保雄先生、昨年デビューした手塚賢司先生も参加されました。



会場の幸手市コミュニティーセンター



会場のようす

1. 第一部・作品発表会

会員が製作した5組のスピーカーシステムは、当会会員の栗田氏が事前にレスポンスの周波数特性を計測し、発表時にプロジェクターでスクリーンに投影する方法で紹介され、それぞれ25分の持ち時間で演奏しました。課題曲はナタリーコールのUnforgettableです。

(1) 篠 義治 氏 : フォステックス W130RD と T25RD による W バスレフ型 2Way

使用したフォステックスのユニットは2013年に限定販売されたもので、いずれも純度99.9%の純マグネシウム振動板とネオジウムマグネットを採用しています。エンクロージャーは低域のエネルギーを受け止めるため板厚24cmの材料を使用し、ネットワークは両ユニットの被りを抑えるため-24dB/octです。バランスが良くクリアな音色で、小型システムとは思えない低域パワーを持っています。「アイネクライネ・ナハトムジーク」では楽器の分離と定位が抜群で、録音現場にトリップしたような錯覚に陥りました。

なお本機の唯一の課題は能率が 86.5dB と低く、しっかり鳴らすためにはパワーが要求される点ですが、発表の際は篠氏自作の DA100 シングル 30W アンプで駆動されており、不足感は全くありませんでした。



(2) 栗田 茂 氏 : フォステックス FW168HR と T250D による TQWT 型 2Way

TQWT (Tapered Quarter Wave Tube) は片側を閉じた管で 1/4 波長で起きる共鳴を利用した低音再生方式で、本機では 30Hz までフラットに再生することを目指しています。この方式の難しいところは、共鳴のピークが多数発生する点で、ユニット位置やダクトの設置などでピークディップを上手く相殺し、共鳴音を抑制するよう工夫したとのことです。ネットワークは -6dB/oct です。本機は特に低域側に音質上の特徴があり、音楽の重低音を意識できる鳴り方です。Brian Bromberg の「This Christmas」ではベースの低音が良く響き、ワイドレンジな仕上がりを感しました。



(3) 中島 孝嗣 氏 : 3Way 全指向性アクティブスピーカー

中島氏は以前から全指向性スピーカーを研究されており、今回は Fountek FW-100B (10cm ウーファー)、SPK Audio FR-2A (5cm フルレンジ)、TAKE T BATPURE (ピエゾスーパーツイーター) の 3Way です。ネットワークは 2Way の-6db/oct で、スーパーツイーターは高域側にコンデンサで接続しています。パワーアンプは低域側、高域側の 2 台のデジタルアンプを組み込んであります。全指向性スピーカーは音像が左右のスピーカーの奥に結像するのが特徴で、本機でも「The Night Has A Thousand Eyes」を歌う Diana Panton が、スピーカーの間の舞台の奥に浮かび上がるように聴こえました。



(4) 寺島 儀巳 氏 : コーラルベータ 10 バックロードホーン

寺島氏が叔父様の遺品整理を頼まれ、倉庫の中でバスレフ箱に取り付けられた状態で発見したスピーカーユニットとのことです。エッジの破損修理など手を入れてバックロードホーンに変更し、さらにツイーターを取り付けて今回の発表となりました。本機は全体的に音像が大きめで、ゆったりとした余裕のある鳴り方をします。Eddie Higgins Quintet の「Autumn Leaves II」では、スケールの大きい演奏を堪能することができました。



(5) 櫻村 幸三 会長 : オールジャパンユニット 4Way システム

当会会長の櫻村氏は長らくスピーカーを中心としたオーディオ活動を行って来ましたが、ふと気が付くと手元に色々なユニットが溜まっており、今回はその中から今では手に入らないようなユニットを纏めてスピーカーシステムを構築したものです。使用ユニットはウーファーがフォステックス FW-301、ミッドローがコーラル 12L-1、ミッドハイがパイオニア PD-100・PH-100、ツイーターがヤマハ 0506 で、クロスポイントは 300Hz、1.2kHz、6~7kHz です。バランスが良く聴き易い音に仕上がっており、天童よしみや小林幸子の演歌が抜群の存在感を持って演奏されました。さすがオールジャパン仕様です。



2. 第二部・関口 英雄 先生「JAZZ 四方山話 6」

新春発表会では恒例となる関口先生の「JAZZ 四方山話」も今回で6回目となります。関口先生は「ジャズは高度に洗練された娯楽である」との理念のもと、ジャズを堅苦しく考えるのではなく、ジャズに親しみ楽しむことを目指して、先生の豊富な所蔵ソフトの中からお薦めの曲を5曲選んで、エピソードと共に紹介いただきました。筆者はジャズの名演奏に巡り合える機会として、この四方山話のコーナーをいつも楽しみにしていますが、今回紹介いただいた中では特に Manhattan Jazz Quintet が1986年に六本木ピットインでライブ録音した「Recado Bossa Nova」(アナログLP) がダントツに良かったと感じました。また Stephane Grappelli と Michel Petrucciani が共演した「These Foolish Things」(CD) も心を打つ名演と思いました。余談ですが、筆者は発表会終了後に、これら2つのソフトを早速ネットで購入しました。



3. 第三部・小澤 隆久 先生「ステレオ音源の疑似モノラル的再生の勧め」

小澤先生は MJ 誌において、ステレオ再生の問題点を改善するためのスピーカーセッティング方法等について研究成果を発表されています。今回はその中からステレオ音源をモノラル音源のように再生するためのスピーカーのデモを実施いただきました。疑似モノラル再生はステレオのスピーカーを左右ではなく上下に積み上げて再生する方法で、ボーカルやメインの楽器など常に中央に位置すべき音源が明確に定位します。また、その他の音も中央の音像の廻りに集中し、あたかもモノラルのように聴こえてきます。小澤先生より「引き続き MJ 誌で研究成果を発表する予定ですので、楽しみにしててください」とのメッセージをいただきました。



発表会の後、3年ぶりに懇親会も開催されました。久喜駅近くの「徳樹庵」に20名のメンバーが集まり、久しぶりの再会を喜び合いました。

なお次回の定例発表会は2023年5月20日の予定です。

(上野 浩資)